

「分析支援プログラム」を活用した効果的な取組事例（中学校）

【羽生市教育委員会】

1 現状と課題

本校では、学習状況調査分析支援プログラムを、全教員がいつでも活用できるように学校共有のフォルダに入れて活用している。また、国・社・数・理・英の各教科において支援プログラムを活用し、本校の課題について分析し、授業立案に役立てている。今回、その中から一事例として数学科での取組をまとめてみた。

本年度の県学習状況調査の結果を、学習状況調査分析支援プログラムを活用し分析した結果、数と式、図形、関数の3分野において、県平均、市平均を下回っていることがわかった。なかでも本校の一番の課題は、正の数・負の数などの基本的な計算問題でつまずきのみられる生徒が予想以上に多かったことである。正の数・負の数の四則計算、指数の計算といった、1年生の1学期に学習する内容の問題の中にも、正答率が5割程度にとどまっているものが何題かみられた。分野別にみても、特に「数と式」の分野において県平均との差が大きく、計算を正確に解く力を身につけさせることが本校の学力向上の重要な第一歩といえる。「数と式」の分野とあわせて、もうひとつ「図形」の分野も正答率が県平均と比べて大きく低いことがわかった。各学年の図形の分野は、2学期以降に授業で扱うことになっており、2・3年生については授業のなかで既習分野の苦手意識を克服させるとともに、新しく習う分野の着実な定着も目指していくことが必要である。

2 具体的な取組

①夏季休業中の補習の実施

既習分野につまずきのみられる生徒が予想以上に多かった現状をふまえ、基礎基本の定着が不十分な生徒の学習機会の確保という観点から、夏季休業中に補習を実施した。本年度は希望性で実施をしたが、授業中の理解が不十分と思われる生徒については、教師側からの声かけもあわせて行った。内容については、正の数・負の数、式の計算、方程式といった、計算主体の基礎的な内容を用意し、これらを少しでも正確に解く力をつけさせることを目標とした。生徒のなかには、補習でやった問題と類似の問題を教科書から探し、ノートに解いたものを見て欲しいと、次の時間に持ってきた生徒もいた。このように生徒のやる気を喚起し、学力向上につなげていくのが補習の大きな役割といえる。

②教え合い学習の充実

授業の中で分からないことがあったらどうするか。の質問に対して、先生にたずねると答えた生徒は全体の約4割であった。すべての生徒が、その場ですぐに教員に質問できることが理想ではあるが、友達に聞いたり、自分で解決しているのが現状である。そこで、各単元の最後に、友達同士でわからないところを教え合う、「教え合い学習の時間」を設けた。この時間



間はプリントを配布し、早く合格した生徒が先生役として、まわりの生徒に教えていく活動である。この取組により、教える側も、教えることでより深い理解が可能になるなど、教える側、教わる側の双方に効果があり、学級全体が丸丸となって取り組むことで、集団全体の学習意欲の向上にもつなげることができた。また、自分の考えをまとめ、相手にわかりやすく説明することに

↑ 教え合い学習の様子

より、言語活動の充実にもつなげることができた。この学習形態は、図形などの個々の理解度の差が大きく、きめ細やかな指導が必要な分野においては、特に効果を発揮することが可能である。2学期の図形の学習の際には、復習等の場面でも教え合い学習の活用を検討している。

③計算の反復学習

計算力をつけるためには計算の反復学習は必要不可欠である。そこで、本校の数学科では、長期休業中に、計算主体の基礎基本のプリント・ワークを生徒の課題として宿題にしている。家庭学習の習慣づけと、基礎・基本の定着の両方を目的とした取組である。

④学習カードを利用した、教員とのコミュニケーションの活性化

本校では、授業を終えたあとに学習カードに授業の感想を書く取組をしている。この活動は生徒の実態を把握することが目的であるとともに、生徒と教員とのコミュニケーションの活性化もねらいとしている。生徒にとっては自分のわからない部分を教員に伝えることができる。教員側は生徒がどの程度授業が理解できたかの目安とすることができ授業の改善にもつながる。また、朱書きを加えることにより、ここの生徒へのアドバイスを行うこともできる。今後も、生徒の理解度が高まるよう、学習カードの意見を大切にしたい授業づくりを進めていきたい。



↑学習カード